

瞳の健康相談所

8

皆さんはコンピュータ断層撮影（CT）や磁気共鳴画像装置（MRI）をご存じかと思えます。人体の断面を撮影し、体外からは見ることのできない内部の構造を画像として見えるようにする検査機器です。

眼科では光干渉断層計（OCT）という、CTやMRIと似たような機能を持つ検査機器を使います。

眼科で一般的に行われてきた眼底検査では、網膜の表面の状態を平面的に把握できても、その奥

最新検査機器・OCT

の状態まで正確に知るの
は困難でした。

OCTでは連続撮影すること
で、網膜の断面や神経線維の厚さなどを立体的な3D画像として表示
できます。

実際の検査は専用の台
に顎を乗せるだけで、造影剤
を使ったり、目に触れたりする
ことはありません。また、数分
で検査

目の内部、3D画像に

も撮影できます。

そのため、体にはほとんど負担
がかからないのがOCTの特
徴でもあり、利点です。

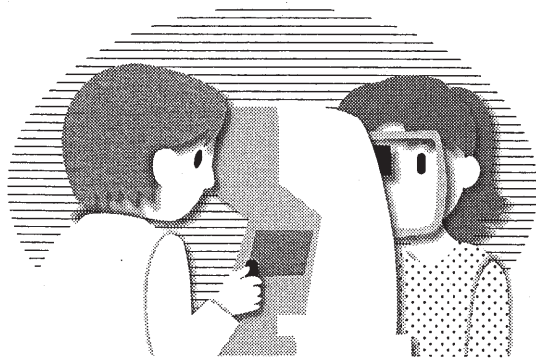
詳細な検査結果を画像で提示
することで、患者の病気に
対する理解が深まることも見
逃せません。

以前は、大学病院など一部の医療
機関にしか設置されていま
せんでした
が、最近では眼科開業医の
多くが導入して
います。導入当初は解像度
も低く、構造が粗く見えて
いた
のですが、現在は非常に高画
質になって
います。

OCTが役立つ代表的な疾患
としては緑内障、加齢黄斑
変性、糖尿病網膜症などがあ
ります。

これらの疾患は、日本人の中
途失明の原因の上位を占めて
います。OCTは早期発見や病
態の把握、治療方針の決定、
治療効果の評価に力を発揮
します。

例えば、緑内障では視神経と
その周囲の神経線維を立体的
に見るこ
と



で、自覚症状がない初期でも異常を捉えることができます。

また、加齢黄斑変性になると黄斑部（網膜の中心）でも視機能が最も鋭敏な

部分）が萎縮したり、脈絡膜新生血管が生じたりしますが、OCTを使うと萎縮や新生血管の有無、病型（滲出型か萎縮型か）を診断できます。

最近では「前眼部OCT」という角膜や虹彩など、眼球の前方の組織の観察もできるタイプも開発されており、応用される疾患は今後ますます広がると
思われます。

なお、OCT検査には2008年4月から健康保険が適応されています。自己負担額は、1割負担の人で200円、3割負担の人で600円です。

（小杉眼科副院長・林 康司）

〈第4月曜掲載〉